

◎例会会場ご注意ください。第108回例会は下記の通り行ます◎

第108回例会のご案内

日 時：2007年1月17日（水）18:30～

内 容：中山経一氏（武蔵文化財研究所）

「千代田区有楽町二丁目遺跡の発掘調査の概要」

会 場：江戸東京博物館 第二学習室

交 通：J R総武線両国駅西口改札 徒歩3分

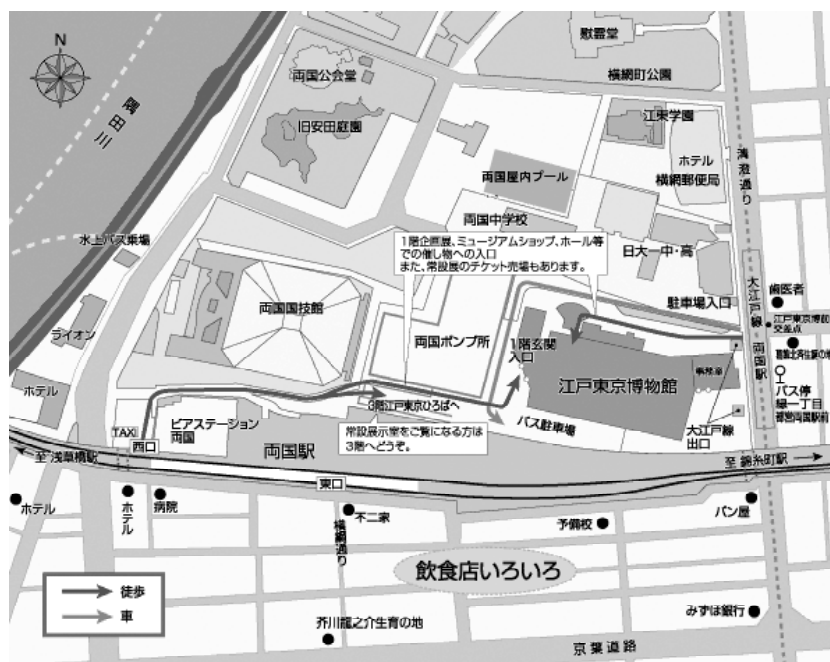
都営大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室

03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>



第 2 0 回 大 会 を 終 え て

寺 島 孝 一

(当会世話人)

本会の前身である「江戸遺跡情報連絡会」の第1回例会が開かれたのが1986年10月であった。それから20年がすぎた。

第1回の会報でかかげた本会設立の主旨は、

- (1) 「江戸」遺跡を発掘している者が、互いの経験・情報を交換しあう。
- (2) 江戸時代の遺跡では、単に考古学的方法だけでなく、文献史学・建築学など関連諸分野の知識が不可欠なため、この方面の専門家の話を伺う機会をもうける。
- (3) 上記の発表をまとめ、また「江戸」遺跡の発掘など最近の情報を広く知ってもらうための速報を内容とする「連絡誌」を発行する。

というものであった。

この間、毎月開いていた例会を隔月にし、年に一回の大会を開催することとし、年ごとにテーマを定めて開いてきた。例会は（夏期の特別例会を含めて）これまでに107回に達し、大会は20回を数えることとなった。

本大会は、千代田区・新宿区・文京区による「徳川御三家江戸屋敷発掘物語」の共同展示とあわせ、また新宿区教育委員会の御協力（共催）を得て「江戸の大名屋敷」をテーマとした。

大会趣旨では「これまで、大名屋敷について都市空間のひとつとして、あるいは国元との関係など」にいつて考えてきたが「近年の大規模再開発事業に伴う大名屋敷の発掘精かを中心に、今まで蓄積した大名屋敷の調査成果」をふまえて「遺構・遺物による屋敷の空間構成をはじめ、屋敷構造の実態や大名屋敷が都市化に果たした役割」などについて、検討するとした。

今大会は、これまでの19回が関連する諸分野も含めいずれも研究者がおもな参加者であったのにたいし、「御三家展」にあわせた大会であり、また新宿区教育委員会の協賛を得ていることから、一般の方々の参加が多く見込まれた。

世話人会でもこれに対応して、一般参加者が理解でき、興味をもてるような内容に、どのような内容や表現にしてゆくののかについてさまざまな議論がなされが、その結果がどうであったかは大方の御批判を待ちたい。

この20年のあいだに、江戸時代の発掘調査は全国にひろがり、また、近年の景気の後退による開発件数の減少、さらに文化庁による「近世遺跡」差別見解の公表などの「逆風」はあったものの、江戸遺跡の研究は長足の発展をとげたといつてよいであろう。

当研究会に限ってみても、大会の成果を纏めた『江戸の食文化』（吉川弘文館）や、世話人を中心に執筆した『江戸考古学研究辞典』（柏書房）など、いくつかの単行本を刊行し、一定の評価を受けている。また、江戸時代の遺跡発掘の記事が新聞などのメディアに紹介されることも多く、今回の「御三家展」のように、江戸遺跡を扱った展覧会もおおく催されているようである。

とすれば、「江戸遺跡」は江戸研究のなかで、一定の位置を占めつつあるともいえよう。

ただ、本会の目的の一つに、関連する諸分野との交流を掲げているにもかかわらず、文献をはじめとする、江戸時代にかかわる諸分野の研究者の参加がきわめて限られているなど、これからへの課題はますます大きくなっているといえるのではないだろうか。「業界用語」の是正は以前から指摘されていることであるが、「敷居」を取りはずすには何が必要なのか考えるべき時にきているのかもしれない。その意味からも今回の、一般参加者を多く迎えた今回の大会は、今後の研究会のあり方を考えるうえで、重要なステップであったともいえよう。

末尾ながら、11月25・26両日にわたり、四谷区民ホールを使用させていただき、またさまざまな御支援をいただいた新宿区教育委員会に、深く感謝の意を表します。

◇江戸遺跡研究会第106回例会は、2006年9月20日(水)午後6時30分より東京文化会館中会議室に◇
◇で行われ、中野高久氏、阿部常樹氏より、以下の内容が報告されました。◇

台東区No. 102遺跡 池之端二丁目1番地地点の発掘調査速報

中野 高久

(台東区文化財調査会)

1. はじめに

発掘調査は、(仮称)池之端二丁目計画に伴う事前調査として実施された。試掘調査は平成18(2006)年1月5日～1月11日にかけて行われた。試掘調査は、台東区教育委員会が実施した。試掘調査の結果、埋蔵文化財の保存状況が良好で上記の事業計画によって埋蔵文化財が失われることが明らかになったため、発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成18(2006)年3月15日～6月3日(大型連休含む)にかけて行われ、調査面積は約637.0㎡である。発掘調査は、台東区教育委員会の指導を受け、台東区文化財調査会が実施し、試掘調査も含め、中野高久が専従した。発掘調査に際しては、排土の置き場所を敷地内で確保する目的から、調査地を北東側(仮称飛地地区)、西側(仮称A区)、東側(仮称B区)に区分して実施したが、一部の排土については敷地内で対応できなかったため、必要に応じて搬出した。また、草炭層(植物

質層)以下の土層堆積状況を観察するため、調査地の東側にて深削調査を実施した。

2. 遺跡の位置と地形

本調査地点は、東京メトロ千代田線根津駅の南、約300mに所在し、上野忍岡遺跡群(台東区No. 4遺跡)、池之端七軒町遺跡(台東区No. 19遺跡：上野警察署上野寮建設地点(慶安寺跡)、サンウツト建設地点)の西側、東京大学構内浅野地区・弥生町遺跡群(文京区No. 28遺跡)の南東側、東京大学構内本郷地区・本郷台遺跡群(文京区No. 47遺跡)の東側に位置している(第1図)。

地形的には、武蔵野台地の東縁辺部の上野台と本郷台に挟まれた旧石神井川を源流とする谷田川(藍染川)によって開析された根津谷の西側に面し、本郷台から根津谷に流れる小谷に立地している。現地表面の標高は、約6.2mを測り、調査地の西側から東側(不忍池)に向かって緩やかに傾斜している。標高4.0m付近では、草炭層(植物質層)が検出されたことから、当該地はかつて低湿地や水草が生い茂った沼地であったと推測される。

草炭層(植物質層)は、根津谷の河口地域にあたる池之端七軒町遺跡(台東区No. 19遺跡)の慶安寺跡地点、茅町遺跡(台東区No. 35遺跡)、台東区No. 80遺跡の池之端一丁目1番地地点(中野2003)などでも確認されている。他の周辺遺跡には、南側に台東区No. 75遺跡の池之端一丁目5番地地点((仮称)旧忍岡住宅所在遺跡)、文京区湯島両門町遺跡(No. 53遺跡)、台東区旧岩崎家住宅所在遺跡(No. 87遺跡)、同遺跡内の湯島貝塚(No. 10遺跡)、文京区湯島(切通し北)貝塚(No. 40遺跡)、文京区龍岡町遺跡(No. 74遺跡)などが所在し、東京大学の赤門周辺には椿山古墳(No. 37遺跡)がみられる(第2図)。

3. 歴史的環境

本調査地点周辺の開発は、天正年間(1573年～1591年)とされる。近世期以降における歴史的変遷については、(財)宮本記念財団・立教大学 学校・社会教育講座1983『旧下谷区池之端七軒町の調査報告書』にまとめられ、なかでも池之端七軒町の成立と変遷については橋口定志氏・吉野健二氏・池田公一氏によって詳細な報告がなされている(第3図～第9図)。

池之端七軒町地域は、慶長4(1599)年には黒柳助九郎(後、畔柳に改名)、枚野(牧野か)金助などの中間が拝領し、その後、慶長9(1604)年には畔柳家の地所を一部買い取り、大正庵(寛永8(1631)年に大正寺と改名)、元和5(1619)年には大正庵と同様、武家地の一部を買い取り、宗賢寺が創建されるなど寺院が成立した。

寺院が集中的に成立してくるのは、寛永年間(1624年～1644年)の前半で、慶安寺、忠綱寺・正慶寺・東淵寺・浄円寺・永昌院・覚性寺などの7寺、正保元(1644)年に妙顕寺、寛文7(1667)年に心行寺、休昌院、元禄12(1699)年に妙極院が創建されている。

武家地では、寛文年間(1661年～1680年)には大沢左兵衛、向井八郎兵衛、浅井七郎左衛門、松平ヒダ(「新版江戸外絵図」)、曲真瀬養安院、人見玄徳、上野八左衛門、正木甚五兵衛(『文政町方書上』)などの武家地が成立している。

池之端百姓町屋は、寛文年間初期(1661年～1664年)には成立し、本調査地点は「池之端百姓町屋2」に該当している(第3図)。「池之端百姓町屋2」は草分け町人7名のひとり「勘右衛門」の町屋に比定されている。また、徳川第4代将軍の徳川家綱期(寛文3(1663)年～寛文12(1680)年)には奥女中「須山」の町屋敷(須山店)があったとされ、第3図の「池之端百姓町屋4」地所が有力視されているが、本調査地点の「池之端百姓町屋2」地所の可能性も指摘されている。

その後、池之端百姓町屋は、正徳3(1713)年5月に代官支配から町奉行支配へ代わり「池之端七軒町」と改名された。町名は草分け町人が7名であったことに由来している。

池之端七軒町の町名は、近世期を通じて存続し、明治2(1869)年と明治4(1871)年の東京府内の町名改正に伴い周辺の門前町を合併した後にも用いられた。

明治10(1878)年以前段階の本調査地点は、「15番地～17番地」の三区画に該当し(第9図)、明治11(1879)年以後に「20番地～22番地」に変わり、明治45(1913)年の東京市及接統郡部地籍台帳によると「濱中善平」の所有地となっている。

その後、池之端七軒町は下谷区池之端七軒町となり、戦後、下谷区と浅草区が合併して台東区が成立した。昭和42(1967)年1月1日の住居表示改正により現在の池之端二丁目が成立した。

本調査地点周辺の火災記録は、数多くあるようであるが、天和2(1682)年12月28日の火災「八百屋お七の火事」(『文政町方書上』、『御府内備考』)後には、「松平対馬守年貢抱屋敷」、「京極兵部抱屋敷」、「浄円寺」、「池之端百姓町屋」(第3図の「池之端百姓町屋1」)などの地所を収公し、天和3(1683)年に新たな道の建設が行われている。

この地割変化により、「松平対馬守年貢抱屋敷」で行き止まりになっていた道が不忍池までの池畔まで達し、現在の茅町二丁目に抜ける幅4間の新道が建設された(第5図)。また、元禄16(1703)年11月の火災「水戸様火事」(『御府内備考』)は、周辺一帯を延焼する大火であったようで池之端七軒町遺跡(台東区No.19遺跡)の上野警察署上野寮建設地点(慶安寺跡)にて、その時期に比定される焼土が堆積層中に確認されている(台東区池之端七軒町遺跡調査団1997)。

4. 主な検出遺構

本調査地点の土地利用は、埋没谷を縄文土器や弥生時代～古墳時代の土器を包含する土壌で盛土造成した後、開始された。生活面は近世期～近現代期まで含めて少なくとも10面は検出されている。

以下、主な検出遺構について概観していきたい。

【土坑】

A区第332号遺構(写真1)は平面形が長方形を呈している。壁面は側板で囲まれ、その内側に板材を縦、横位に幾重にも配している。板材には本来、桶の側板として用いられたものもみられた。底板は検出されていない。覆土は上層に焼土が堆積しているため、火災を契機に廃絶されたと推測される。火災の年代については、検出層位や出土遺物の様相などから天和2(1682)年か元禄16(1703)年の火災が考えられ、推定廃絶年代もこの時期にあたと推測される。

B区第27号遺構は平面形が長方形を呈し、長軸2.70m、短軸1.30m、確認面からの深さ1.11mを測る。覆土中には柄杓が3個体互い違いに並べられた状態で出土している。推定廃絶年代は18世紀初頭頃と考えられる。

【地下式坑】

A区第490・510号遺構は長方体の箱状ものが埋設されていた。両遺構は隣接して構築され、掘り込みは草炭層(植物質層)まで達していた。

A区第490号遺構(写真2)は、側板4枚、底板1枚で構成されている。長軸の側板にはほぼ中位に切れ込みがみられるため、機能時には仕切板のようなものが備え付けてあったと推測される。覆土の中位には板材片が廃棄され、下位から瀬戸・美濃系陶器灰釉緑釉流し菊花皿が出土している。推定廃絶年代は17世紀半ば頃と考えられる。

A区第510号遺構は、側板2枚以上、底板1枚で構成されている。西側の掘方からは小刀(刀子)が出土している。推定廃絶年代は17世紀半ば頃と考えられる。

【溝】

A区第34号遺構とB区第1号遺構は石組溝である。石組溝はいわゆる「しがらみ」による土留め後に転用材(元来、建築材)を配し、その上面に間知石が据えられていた。間知石は裏込石の状況から複数段は積まれていたと考えられる。主軸方向はA区第34号遺構が東西方向、B区第1号遺構が南北方向である。両遺構の性格はA区第34号遺構が町屋内の境界施設、B区第1号遺構は町屋と寺院地との境界施設と推測される。両遺構は幕末期頃までは機能していたと考えられる。

A区第293号遺構は木組溝である。主軸方向は東西方向を向いている。溝内にはごみを絡め取るためか杭が打ち込まれていた。本遺構は複数回の改修が行われており、継続的に使用されていたと考えられる。機能は町屋内の境界施設と考えられる。

B区第11号遺構(写真9)は素掘りである。主軸方向は南北方向を向いている。掘り込みの断面形は逆台形でやや南側にテラスを有している。掘り込みの西壁面には太細の枝が重層的に配されていた。掘り込みの深度は、テラスを境に北側が深く、南側が浅い。テラスの機能は判然とはしないが、横断施設のようなものがあつたのであろうか。機能は町屋と寺院地との境界施設と推測される。推定廃絶年代は17世紀第4四半期頃と考えられる。

以上のことから、町屋(本調査地点西側)はA区第34号遺構、A区第293号遺構を境界とし、三区画に分かれていたと推測される。また、町屋と寺院地との境界はB区第1号遺構がB区第11号遺構より東側に構築されているため、18世紀以降に町屋の敷地が拡張されたと考えられる。

【井戸跡】

A区第511号遺構は井戸側を有し、上水施設(竹樋)が引き込まれていた。検出時には井戸側の内側から栓がされていた。底板は穿孔され栓が検出された。栓は中心部が割り抜かれ、竹筒が差し込まれていた。竹筒には棕櫚が巻きつけられ、その上から縄が巻かれていた。

B区第41号遺構は井戸側を伴わないタイプで青灰色シルト層まで掘り込まれていた。出土遺物は

少量が出土し、被熱しているものがみられた。

A区第587号遺構は井戸側を有し、掘方から火鉢の上に下駄が逆さまに載せられた状態で検出された。火鉢内には灰色土が充填されていたが、胞衣などが埋納されたのであろうか。火鉢はいわゆる江戸在地系土器瓦質火鉢である。脚は貼付の三足で体部にナゲ調整が顕著にみられた。下駄は一本作りでいわゆる「連齒下駄」である。火鉢の年代は17世紀半ば頃のものと考えられる。

【埋桶(便槽)】

埋桶は単独あるいは複数基が隣接して構築されている。単独例にはA区第92号遺構、複数基例には2基が並んだ飛地地区第7・8号遺構、6基が集中したA区第341～345.364号遺構(写真3)などがみられる。覆土はいずれも層薄な砂とシルト土が交互に堆積していた。

A区第92号遺構では桶の内側に白色物質が顕著にみられ、底板直上からは鉄分の塊や銭貨が確認された。A区第341(写真3：下段左端)、342号遺構(写真3：下段中)では底板直上から種実遺体が多量にみられた。推定廃絶年代はA区第92号遺構、飛地地区第7・8号遺構が明治期、A区第341～345.364号遺構が18世紀末頃～19世紀前半頃と考えられる。

【埋甕(便槽)】

A区第75号遺構は胴部下半以下が検出された。甕は常滑系陶器大甕で内面には白色物質が顕著にみられた。覆土は上位層に後世の堆積土がみられ、下位層には本遺構の覆土である砂が堆積していた。底部からは鉄分の塊や銭貨が出土している。推定廃絶年代は明治期と考えられる。

【胞衣埋納遺構】

胞衣埋納遺構は、埋納容器に土器皿と曲物を用いたものが確認された。土器皿は在地系でいわゆる「合わせ口」に重ねた状態で検出された。試掘調査(調査地東側)では見込みに「壽」印が型打された例がみられた。

共伴遺物には上皿の上面に墨が置かれていた例(A区第188号遺構)、皿の脇に瀬戸・美濃系陶器灰釉徳利が添えられていた例(A区第71号遺構)、墨と徳利が両方伴った例(A区第80号遺構、写真4)がみられた。検出された土器皿の多くには皿の内側には粘質が極めて強い灰色土がみられ、A区第188号遺構ではその一部が黄色に変色していた。

曲物例(写真5)はA区第496(写真6)、497.498号遺構である。これらは隣接して構築され、A区第497.498号遺構は切合関係が認められる。容器の法量は、最も遺存状態が良好なA区第497号例で径約18.0cm、高さ17.1cm(残存値)を測る。曲物の内側には粘質が極めて強い灰色土がみられ、底部には石が二個ずつ納められていた。石は産石と推測される。産石は産神の依り代で、子供が生まれるとすぐに炊かれる飯(産飯)と伴に膳の上に載せられたものである。推定理設年代は17世紀末頃～18世紀前半頃と考えられる。また、現在では目視できないが、本来は外面に墨で「松竹、鶴亀」などの吉祥文様が描かれていた可能性が考えられる。

【建物址】

建物址の地業には樽地業と筏地業がみられた。樽地業は樽一胴木一枕木、筏地業は胴木一枕木で

構成されている。両地業の胴木、枕木には建築材が再利用されていた。

樽地業はこれまでの研究から土蔵跡(写真7)と考えられる。布堀りには陶磁器、土器、瓦、礫、木材などが出土している。西側の布堀りでは樽との間に礫が充填されていた。枕木は主に三本1単位とし、南側ではほぼ均等間隔に据えられているが、他では区々である。

胴木の長さは区々で布堀りの規模に合わせて配されている。胴木には焼印がみられる例があり、敷居も使用されていた。樽は逆位に埋設され、内側に漆が塗布された例がみられた。逆位に埋設された樽は、底板を除去あるいは内側に落とし込んだ後にローム土を充填している。樽内には底部にやや大きめな礫を充填した例や西側では碎石とローム土が相互に充填されていた。

土蔵は、土層堆積状況などから同じ場所で数回建て替えが行われたと考えられる。各時期の構築年代は判然とはしないが、布堀りから肥前系磁器丸碗(いわゆる「くらわんか手」)が出土していることから1707年以降に構築されたと推測される。

A区第460号遺構(写真10)は一木を半分に切断し、切断面を下に向け据えられている。木の周囲には細碎石が配されている。木の下面には大型石が間隔的に据えられ、その周囲に小型石が配されている。本遺構は17世紀後半頃の建物基礎と考えられる。

【礎石】

最も古い時期にあたる礎石は、A区の西側で検出された。本期の礎石は掘方が明確に検出されなかったため、造成時に礎石が配置されたと考えられる。構築時期は上面が天和2(1682)年か元禄16(1703)年の火災層で覆われているため、17世紀末頃を中心とした時期と考えられる。もし、仮に本建物が火災によって焼失したならば、焼土層中に少量の瓦がみられるため、建物の一部が瓦葺きであった可能性が考えられる。

【上水施設】(写真11)

上水は調査地の西側から引き込み、井戸に導水されていた。上水施設は複数系統が検出され、竹樋、継手、溜桶、溜樽などで構成されていた。また、複数面で検出されたが、ほぼ同一箇所にも重層的に構築されている例が多くみられた。

掘り込み内には埋設時の土留にしたためか板が渡された例がみられ、板材下に竹樋が通されていた。竹樋の大半はそのまま埋設されるが、支材として竹樋下や脇に板材がみられ、脇には本来継手に使用されていた材が再利用されていた。竹樋の中にはシルト土が溜まっていた。

継手は脇を丸材や角材、下面に敷板が据えられるなど堅固に固定された例がみられ、上下二段に連結された例がみられた。継手の孔は通常、ほぼ中央部に一箇所だが、上下二箇所に穿孔される例がみられた。継手の内側には漏水を防ぐためか棕櫚が充填され、継手自体をシルト土で覆っていた例がみられた。継手の上面や下面、側面には墨書、刻字、記号、焼印などが記されていた。刻字には「上」、「上 上」、焼印には「○に介」印がみられた。また、溜樽の蓋には墨書で「稲本屋・伊丹口白・三郎助」銘が記されていた。止水方法は主に竹樋に栓を用いた例がみられた。

【硬化面】

硬化面は複数面で検出された。A区第37号遺構(写真12)は調査地点の西側で検出され、調査範囲外まで及んでいる。主軸方向は東西方向である。硬化面には貝殻片を包含する土壌がつき固められた例もみられた。本遺構は路地跡と考えられる。

【他】

他遺構では石敷や瓦敷(写真8)が検出された。また、直径が20cm程の桶や10cm角の木箱が木組溝の隣接地点に埋設されていた。性格は判然とはしないが、埋納施設と推測され、胞衣が埋納あるいは分納されていた可能性が考えられる。また、アワビが埋納されたと考えられる遺構も検出されている。

【土管】

土管は仮称A地区、飛地地区で検出された。A地区では縦横位、斜位に埋設され、煉瓦施設を介する例もみられた。飛地地区では南北方向に本管が埋設され、本管と木組溝の間を土管で繋いでいる例がみられた。

5. 出土遺物

近世以前では、盛土造成層や近世期の遺構から縄文土器(後晩期が主体)、古式土師器が出土し、近世期の遺構から中世期の常滑産甕などが出土している。本調査地点周辺における縄文時代後晩期の様相については香取祐一氏がまとめられている(香取1999、2005b／第11図)。

近世期では、17世紀前半～幕末期までの陶磁器、土器、瓦、石製品、金属製品、貝製品、木製品、布製品、動物遺体、植物遺体などが出土している。また、本調査地点の立地環境から木製品も豊富に確認されている。主な遺物には中国磁器、17世紀前半頃の織部、志野、備前系陶器瓶類、梅鉢文の軒丸瓦(軸、剣先なし)、貝杓子、漆器盆、人形かしら(カマ穴なし、胡粉、口：赤色塗布、甲人形)などがみられる。

なお、梅鉢文の軒丸瓦は池之端七軒町遺跡(台東区No. 19遺跡)の上野警察署上野寮建設地点(慶安寺跡)地点のD-7一括例から軸と剣先を有するタイプが出土している。また、同地点では縄文時代～平安時代後期の土器が整地層の埋土、近世期の土坑や埋葬施設、表土掘削時に出土していることから、東京大学本郷構内遺跡(本郷台遺跡群)や弥生町遺跡群との関係が指摘され(小俣1997)、ダイナミックな土の移動(前田家屋敷からの排出土が当該地に整地土壌として搬入されたあるいは前田家屋敷のゴミが当該地に廃棄された)があった可能性が考えられる(中野2003a)。また、小俣悟氏は整地層の供給先について整地層の構成諸要因を総合的に検討していく必要性を述べている。

近代期では、「九谷製」銘の磁器色絵丸碗、「比陶」・「HIRA SEITO」銘の磁器皿、いわゆる「統制陶磁」などが出土している。

6. おわりに

ここでは、これまでに明らかになったいくつかの調査成果や若干の考察を行いたい。

本調査地点は、かつては低湿地や水草が生い茂った沼地であり、当該地の開発時には盛土造成が行われた。盛土には縄文土器、弥生時代～古墳時代の土器が包含され、採土地に東京大学本郷構内遺跡(本郷台遺跡群)や弥生町遺跡群の可能性が考えられる。

土地利用については、木組溝の複数回に亘る改修、土蔵の同一場所での建て替え、各時期の上水施設がほぼ同一掘り込み内に埋設されているなど土地利用に制約性がみられた。町屋は検出遺構の配置から三区画に分かれる。その区画は明治10(1878)年以前段階(第9図)の区画に対応すると考えられ、その区画は近世期まで遡る可能性が推測される。

胞衣埋納容器に曲物が用いられていたことは、文献資料では知られていたが、発掘調査における検出例は本例が初例と考えられる。胞衣埋納容器における土器皿例以外では、港区黄檗宗瑞聖寺仙台藩伊達家墓所跡の胞衣桶例(谷川1998、松本1998)があり、年代は4代藩主伊達綱村の正室千姫が嫡男扇千代を出産した際の胎盤と考えられ、扇千代が誕生した天和元(1681)年に納められたと推測されている。また、中央区日本橋一丁目遺跡では55基の胞衣埋納遺構が確認され、第4面の244号では埋桶に胞衣皿、瀬戸、美濃系陶器德利、壺が納められた例がみられる(日本橋一丁目遺跡調査会2003)。胞衣埋納遺構については詳細な検討がなされ、年代は明和9(1772)年前後と推測されている(仲光2003)。

金子智氏は千代田区岩本町二丁目遺跡の報告書にて埋桶のうち、小型なものについて胞衣桶の可能性を指摘し(金子2001)、追川吉生氏は新宿区加賀町二丁目遺跡Ⅰの小型桶例、小石川牛天神下遺跡のなかで土器皿を伴う胞衣埋納遺構と類似性の高い検出状況を示す事例を紹介するとともに、遺存しにくい材質容器の存在に注意を促している(追川2002)。

なお、土器皿例は中央区日本橋一丁目、二丁目遺跡において面的に捉えられる事例が検出され、日本橋一丁目遺跡では18世紀前葉～中葉(仲光2003)、日本橋二丁目遺跡では18世紀中葉に出現し(仲光2001)、小林謙一氏の集成資料(小林2002)によると、18世紀後半から増加傾向が伺える。

今後は、土器皿以外の容器に対する意識を持ち、胞衣が分納されたことも考えられるため、材質に関係なく小法量容器の出土状況にも注意を払っていくことがあげられる。また、このような事例を蓄積することにより、土器皿出現以前の様相や土器皿との共存問題、江戸遺跡における胞衣埋納遺構に伴う習俗儀礼のあり方などが明らかになると考えられる。

上水施設は、台東区では元禄9(1696)年完成の千川上水が知られているが、本調査地点例はローカルネットワークによって成立していた。水源は本郷台からの湧水が想定され、育徳園の心字池(現、三四郎池)であった可能性も考えられる。

育徳園は加賀藩本郷邸が下屋敷であったところに設けられ(森下1990)、本郷邸の絵図資料で最古とされる「武州本郷第図」にも描写されている。本図は1682年～1688年頃の藩邸様子を示したもの(細川1990)で、心字池の泉水は池の北東隅から流れ出て、まっすぐ北に向かい、現在の弥生門辺りまで達している。藩邸内の様子を描写した絵図は本図以外にも知られているが、藩邸内における流水方向はほぼ変わらないようである。

藩邸を出た泉水の行方は、定かではないが、「前田家本郷御屋舗図(本郷御屋舗之図)」(1761～1771)、「前田家本郷屋敷略図」(1803～1806)では水戸藩徳川家中屋敷内に引き込まれている様子が描写されている。

もし、仮に心字池の泉水を導水していたと仮定すると、本調査地点に至る導水ルートは、「江戸御上屋敷絵図(江戸御上屋舗惣御絵図)」(1840～1845)に参謀本部陸軍部測量局作成の明治16年測量図「東京府武蔵本郷區本郷元富士町近傍」の等高線を合成したものなど(第10図～第11図)から推測すると、現在の弥生門辺りから南東側に低くなっているため、藩邸を取り囲む石垣から石組溝のような施設に排水され、地形に沿って南東下し、臨済宗東淵寺辺りで北側に分岐し、池之端七軒町を縦断する道下に引き込んでいたと考えられる。

また、絵図の精緻性も考慮しなければならないが、水戸藩邸内まで泉水が至っていたとすると、「東京共同射的會社」による削平で詳細な地点は判然とはしないが、水戸藩邸を取り囲む石垣などから排水されたものを引き込んでいたと考えられる。

心字池の泉水の行方については、今後水戸藩中屋敷跡にあたる地点の発掘調査が実施され、藩邸内の土地利用が具体的に明らかになることが期待される。

(註)本発表は速報という性格から今後、整理調査が進むうえで発表内容に修正がなされる可能性があることを断っておくとともに、本報告をもって正としたい。

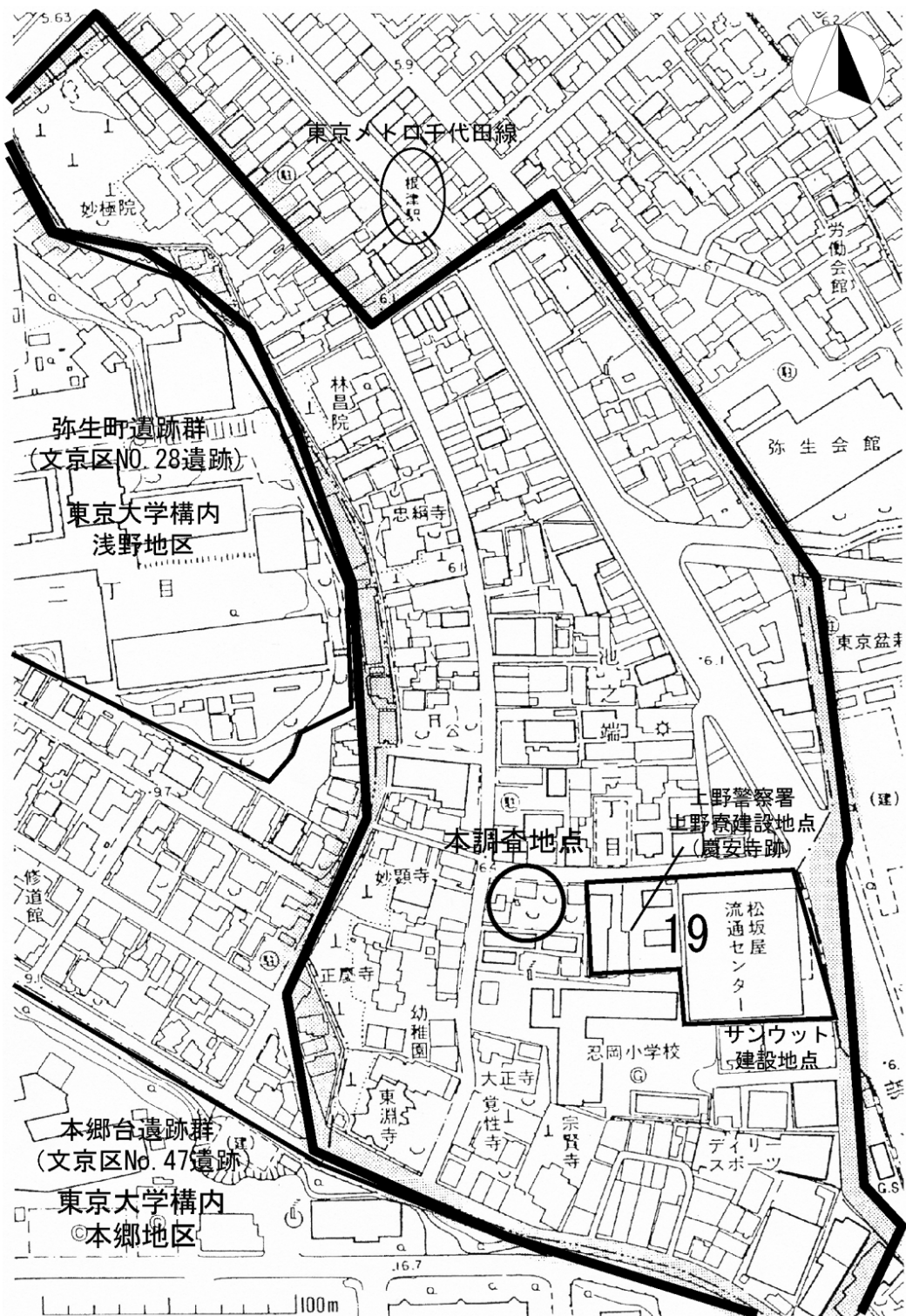
謝辞

本稿は平成18(2006)年9月20日に東京文化会館の中間会議室2にて開催された江戸遺跡研究会第107回例会で口頭発表した内容を補訂したものである。本発表に際しては、小俣悟氏(台東区教育委員会文化財保護調査員)に発表のご許可を頂き、堀内秀樹氏(東京大学埋蔵文化財調査室)、追川吉生氏(東京大学埋蔵文化財調査室)にご教示を賜った。堀内秀樹氏には発表に至るまでのご便宜を図って頂き、崎野千代美(台東区文化財調査会調査員)、川西瑞、村山卓の各氏にはご協力を頂いた。江戸遺跡研究会の世話人の方々には本発表の機会を頂いた。また、例会にて谷川章雄氏(早稲田大学人間科学部教授)、成瀬晃司氏(東京大学埋蔵文化財調査室)、追川吉生氏(東京大学埋蔵文化財調査室)、川西直樹氏(加藤建設埋蔵文化財株式会社調査部)には有益なコメントを頂いた深謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 追川吉生 2002 「江戸時代の袍衣埋納に関する一考察—江戸遺跡における検出例の分析を中心に—」『東京考古 第20号』東京考古談話会
- 追川吉生 2004 『江戸のマイクロコスモス・加賀藩江戸屋敷』新泉社
- 小俣 悟 1997 「第4章総括 3 地質と整地」『池之端七軒町遺跡(慶安寺跡)』台東区池之端七軒町遺跡調査団
- 香取祐一 1999 「第1節縄紋時代 2 小結」『茅町遺跡』台東区文化財調査会
- 香取祐一 2005a 「第3節 遺跡の位置と環境」『東京大学埋蔵文化財調査室報告書6 東京大学本郷構内の遺跡』

- 工学部 1 号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 香取祐一 2005b 「第 4 節縄文時代」『東京大学埋蔵文化財調査室報告書 6 東京大学本郷構内の 遺跡 工学部 1 号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 金子 智 2001 「(3)いわゆる胞衣埋納遺構について」『岩本町二丁目遺跡』千代田区教育委員会
- 小森隆吉 1991 『台東下谷町名散歩』聚海書林
- 小林謙一 2002 「埋められたカワラケ」『江戸在地系土器の研究』V 江戸在地系土器研究会
- (財)宮本記念財団・立教大学 学校・社会教育講座 1983 『(財)宮本記念財団調査報告 2 立教大学博物館学研究室調査報告 23 旧下谷区池之端七軒町の調査報告 昭和56年度』
- 参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量原図「東京府武蔵本郷區本郷元富士町近傍」
- 台東区池之端七軒町遺跡調査団 1997 『池之端七軒町遺跡(慶安寺跡)』
- 台東区文化財調査会 1999 『茅町遺跡』
- 谷川章雄 1998 「瑞聖寺所出土の伊達家の胞衣桶について」『港区文化財調査集録 第 4 集』東京都港区教育委員会
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「東京大学本郷構内の遺跡 農学部校舎(7 号館)地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報 4 2000・2001・2002年度』東京大学埋蔵文化財調査室
- 中野高久 1999 「近世遺跡の胞衣埋納遺構－検出状況にみる土地利用の復元－」『関西近世考古学研究Ⅶ 上方と江戸－近世考古学から見た東西文化の差異－』関西近世考古学研究会
- 中野高久 2003 a 「「遺跡からみた江戸のゴミ」に寄せて」『江戸遺跡研究会会報 No. 89』江戸遺跡研究会
- 中野高久 2003 b 『東京都台東区～池之端一丁目 1 番地地点～(新上野区民館建設地)発掘調査概要報告』(台東区教育委員会文化事業体育課(現、生涯学習課)提出文書)
- 仲光克顕 2001 「第 2 節 日本橋二丁目遺跡における土地利用の変遷」『日本橋二丁目遺跡』日本橋二丁目遺跡調査会
- 仲光克顕 2003 「2. 胞衣埋納遺構の検討」、「第 2 節 日本橋一丁目遺跡における土地利用の様相」『日本橋一丁目遺跡』日本橋一丁目遺跡調査会
- 日本橋一丁目遺跡調査会 2003 『日本橋一丁目遺跡』
- 西秋良宏編 2000 『東京大学コレクションⅩ 加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学総合研究博物館
- 橋口定志・吉野健二・池田公一 1983 「2. 池之端七軒町の成立と変遷」『(財)宮本記念財団 調査報告 2 立教大学博物館学研究室調査報告 23 旧下谷区池之端七軒町の調査報告 昭和56年度』(財)宮本記念財団・立教大学 学校・社会教育講座
- 細川 義 1990 「第 2 節 加賀藩本郷邸の全体図について」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 考察編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 松本 健 1998 「瑞聖寺旧伊達家墓所出土「胞衣桶」の保存処理に伴う調査」『港区文化財調査集録 第 4 集』東京都港区教育委員会
- 森下 徹 1990 「第 2 節 育徳園」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 考察編』東京大学埋蔵文化財調査室



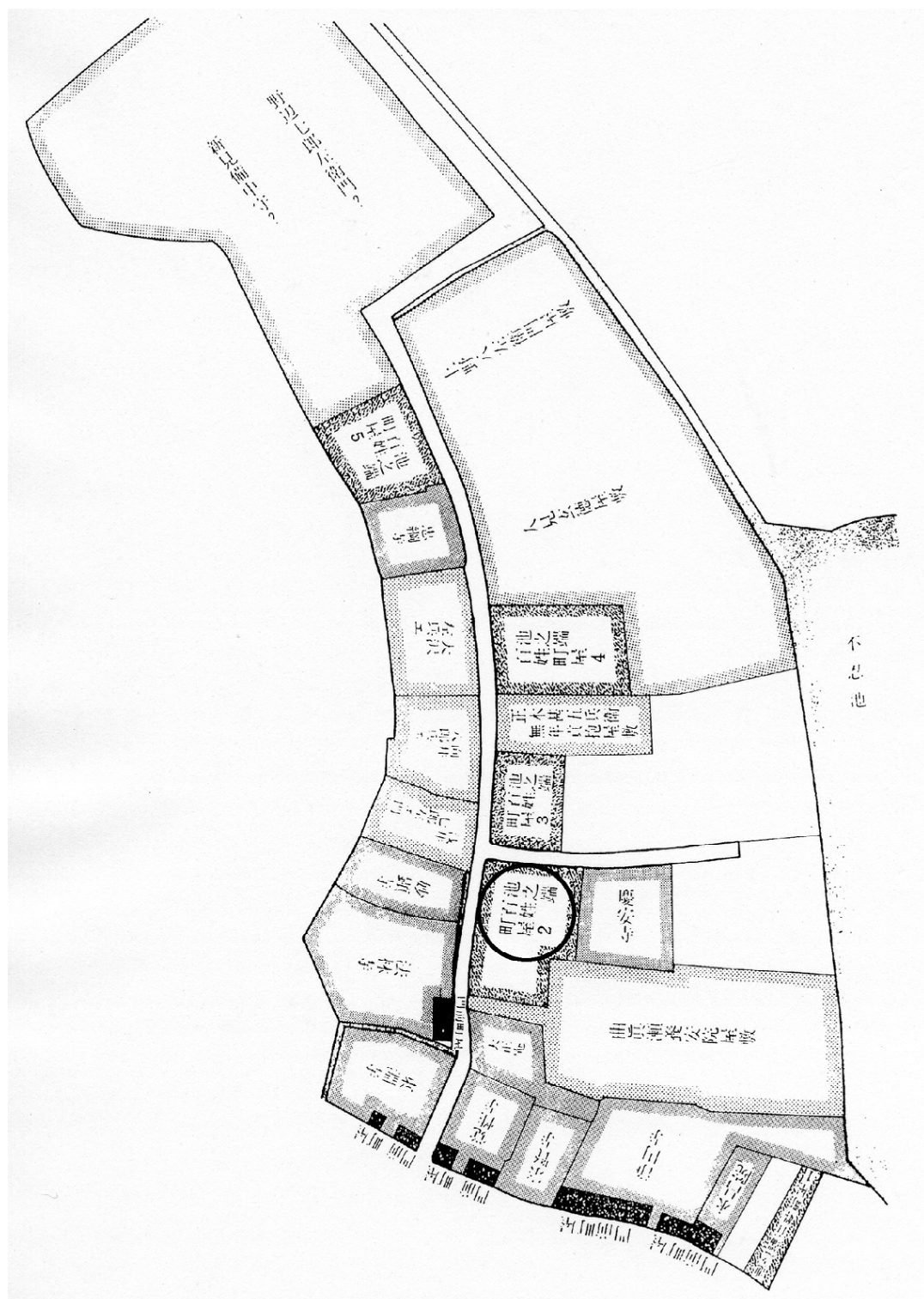
第1図 本調査地点及び近隣遺跡と池之端七軒町の範囲(図中太線)

(橋口・吉野・池田1983の掲載挿図に加筆)



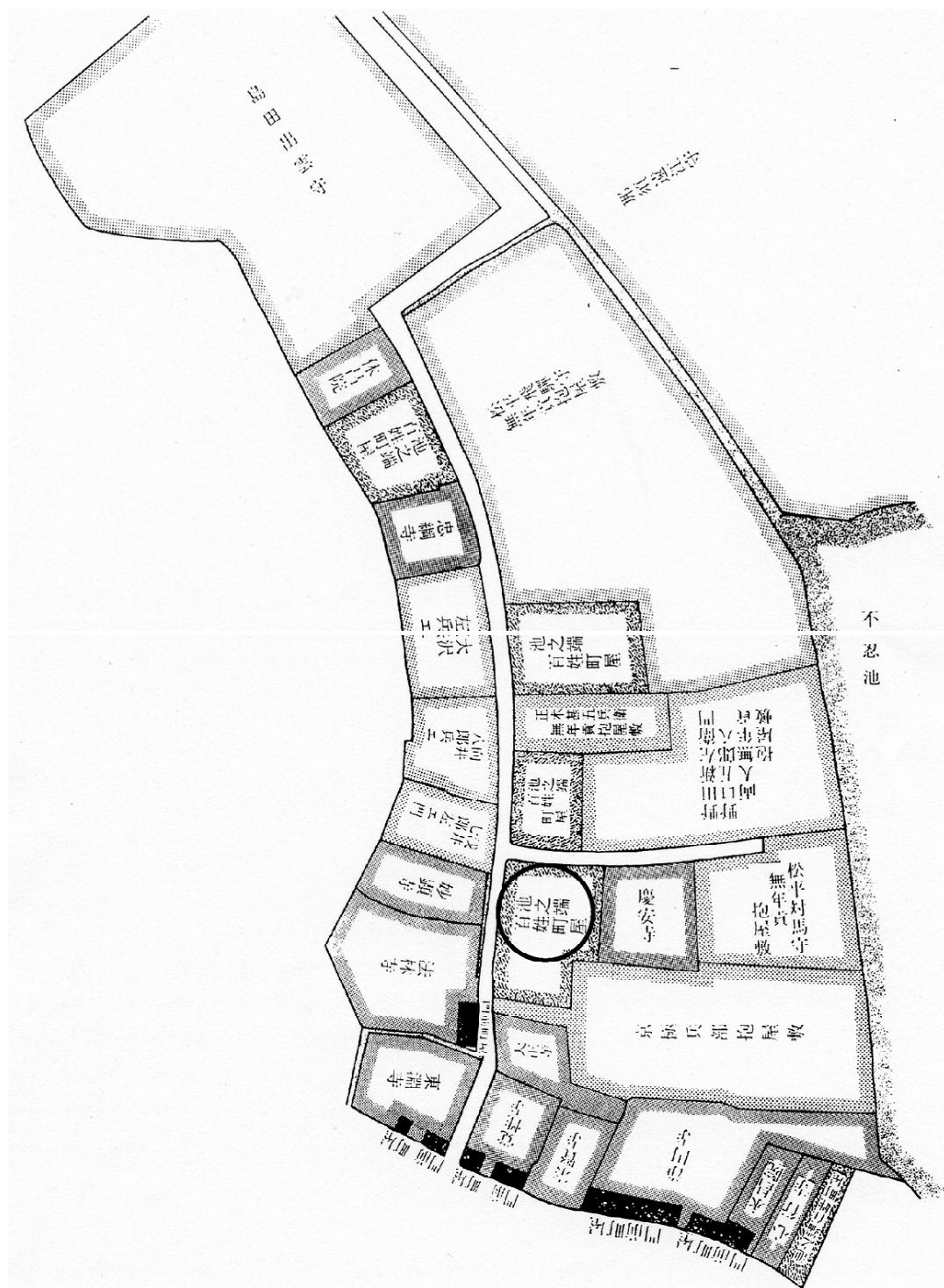
第2図 本調査地点及び周辺遺跡

(図中点線：台東区と文京区の区境)

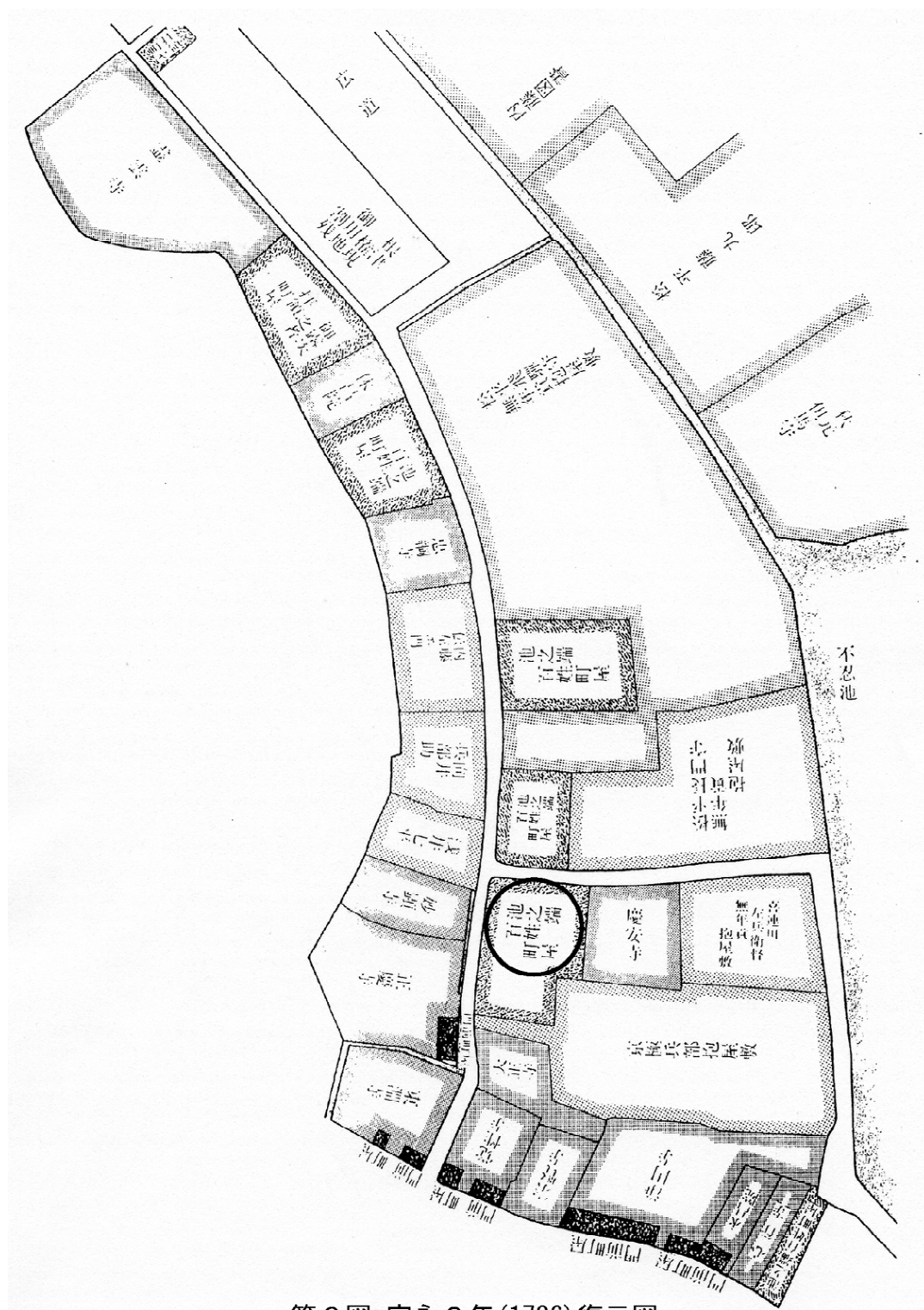


第3図 寛文年間初期(1661~1664頃まで)復元図

(図中○印：本調査地点／橋口・吉野・池田1983の掲載挿図に加筆)

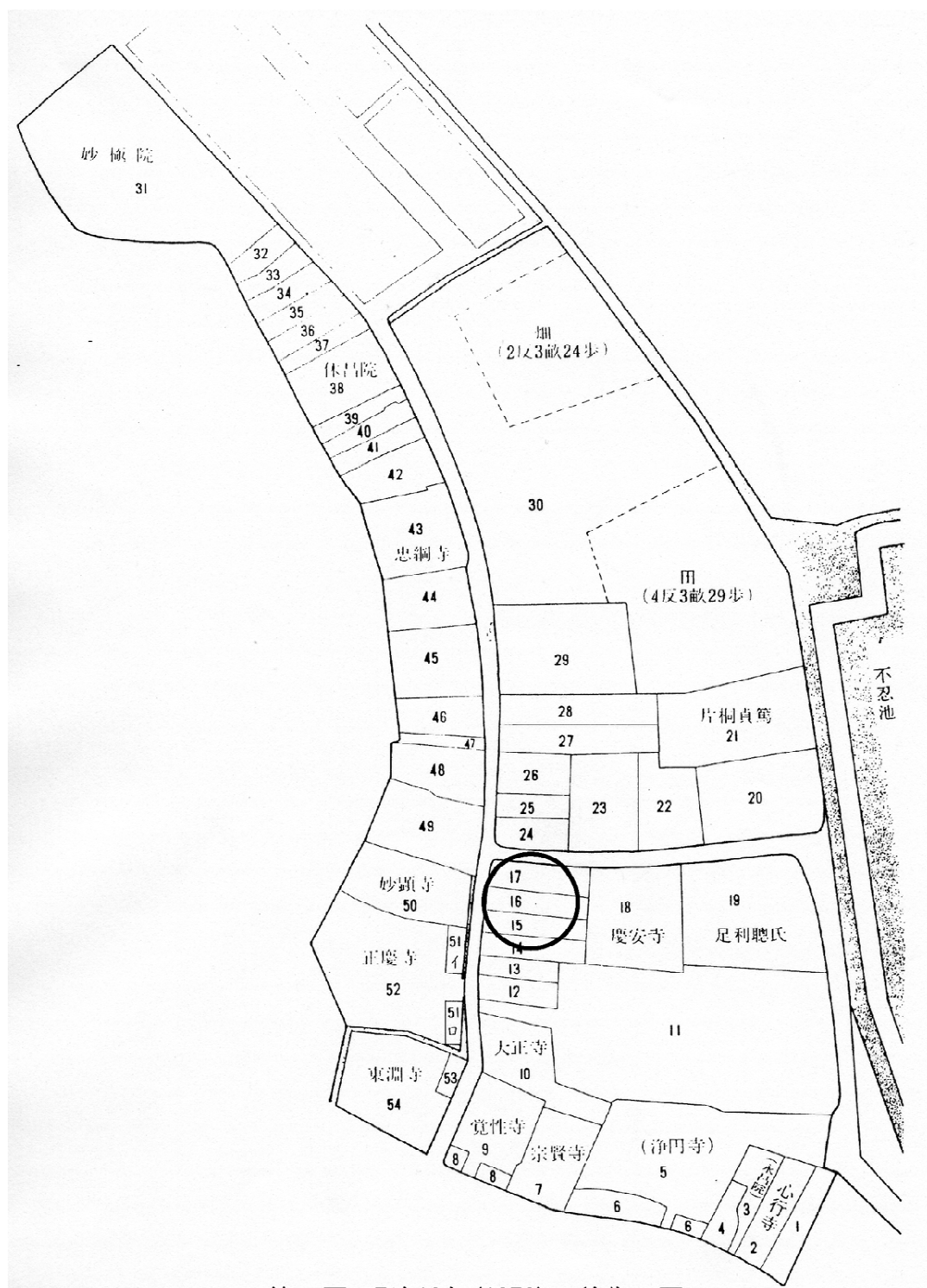


第4図 延宝年間(1673~1680)復元図
 (图中○印：本調査地点／橋口・吉野・池田1983の掲載挿図に加筆)



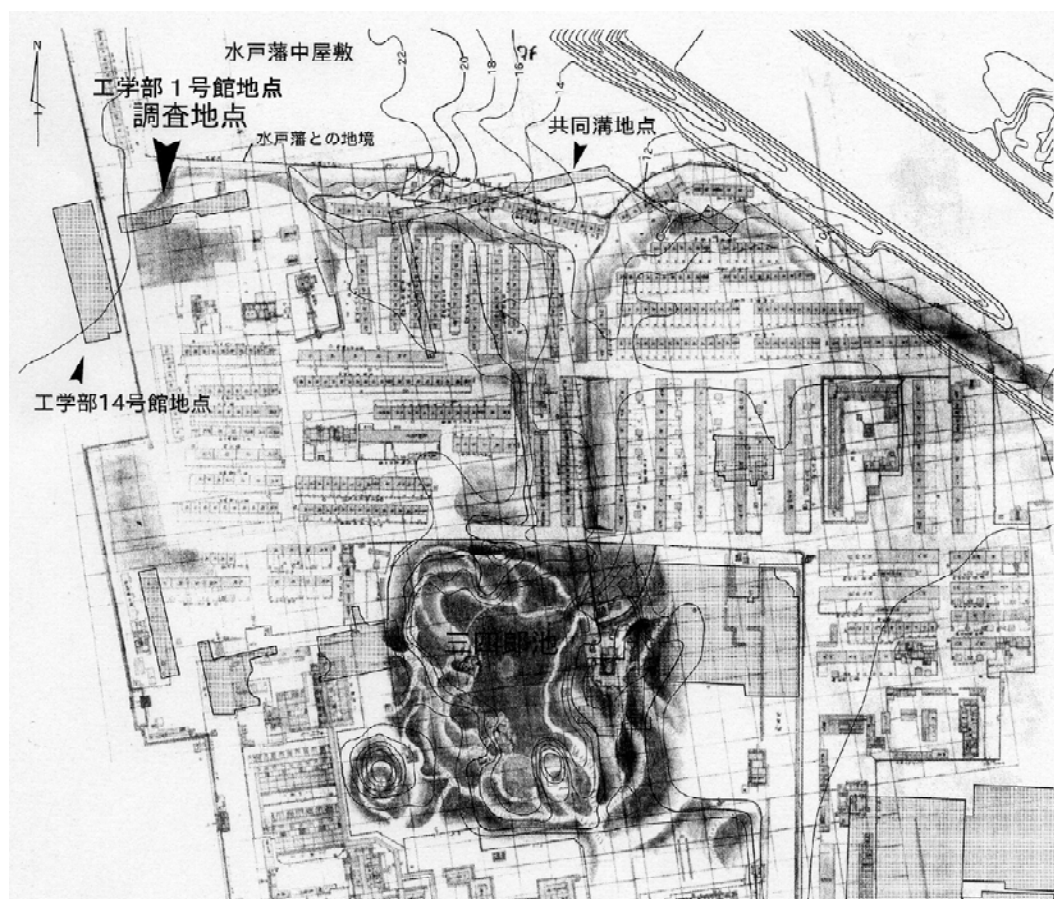
第6図 宝永3年(1706)復元図

(図中○印：本調査地点／橋口・吉野・池田1983の掲載挿図に加筆)



第9図 明治10年(1878)以前復元図

(図中○印：本調査地点／橋口・吉野・池田1983の掲載挿図に加筆)



第10図 江戸御上屋敷絵図
(香取2005aの掲載挿図に加筆)



第11図 縄文時代後晩期の土器出土遺跡と心字池泉水の流れ
 (图中数字：標高値／点線：泉水の流水／破線：推定線、香取2005bの掲載挿図に加筆)



写真1 A区第332号土坑例（北から）



写真2 A区第490号地下式坑例（西から）



写真3 A区341～345.364号埋桶例（西から）



写真4 A区第80号胞衣皿例（南から）



写真5 A区496～498号胞衣曲物例（西から）



写真6 A区第496号胞衣曲物例（西から）



写真7 A区土蔵跡例（東から）

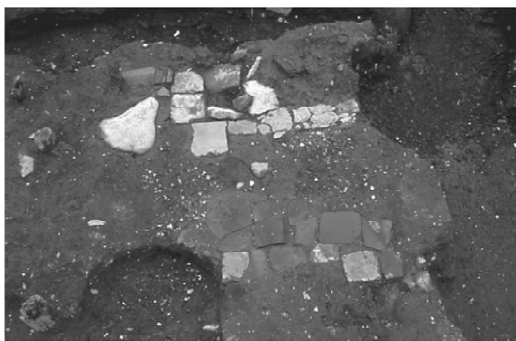


写真8 A区石敷例、瓦敷例（西から）

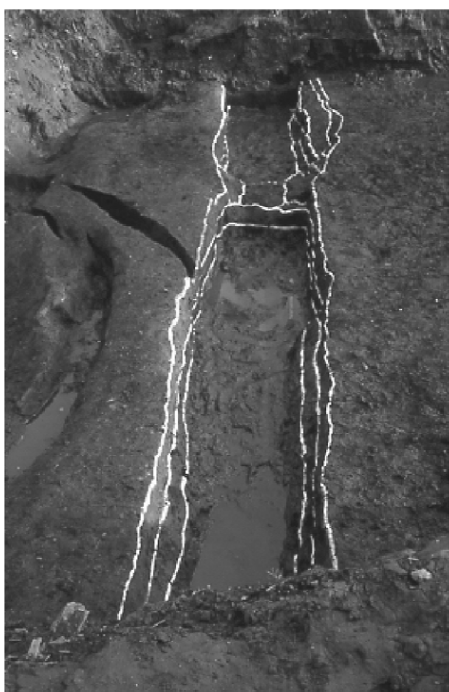


写真9 B区第11号溝例（北から）



写真10 A区第460号建物基礎例（東から）



写真11 A区上水施設（東から）



写真12 A区第37号遺構（西から）

江戸遺跡出土の貝殻製漆パレット —使用されている貝種からの視点—

阿部 常樹

(東京大学埋蔵文化財調査室)

はじめに

江戸遺跡において、漆工を行なう際に“パレット”として使用された貝殻が出土する。従来、報告書においては、サイズやそれに使用されている貝の種類(貝種)のみが記載されているだけで、詳細な分析及び考察は、その内面に付着する漆についてのものが中心であった。しかし、食べ物としての貝類は流通のされ方によって、貝殻部分の廃棄される過程や場所は様々であり、単純にそれぞれの消費地で廃棄されているものを再利用したとは考えづらい。そこで、本発表では、“漆パレット”に使用されている貝種に注目し、それらの貝が、パレットとして使用されるまでの来歴を中心に検討をおこなう。

1. 貝殻製漆パレットの定義(表1)

北野信彦は、新宿区坂町遺跡より出土した一連の漆工関連遺物をその作業工程に沿って整理している(北野 2002)。そのなかで、提示された漆工作业工程から、“漆パレット”は、「色漆の塗布や漆継ぎなどの作業に際して必要少量を取り分けるのを目的に用いられた貝殻」としている。本発表において、“漆パレット”の定義は、以上のものに基づく。

2. パレットに用いられている貝種と江戸におけるその食料としての位置づけ

江戸遺跡から出土している貝殻製漆パレットに用いられている貝種は、ハマグリ、バカガイ(あおやぎ)、トリガイ、アカガイ、ウバガイ(ほっき)、ミルクイ(みるがい)である。

さて、『守貞謄稿』巻之六 生業下「鮮魚売り 枯魚売り」において江戸で売買されていたものとして記されている貝種を抜き出すと、「蛤」、「あさり」、「ばか」、「さるぼう」、「鳥貝」、「赤貝」、「蠣」、「蜆」の7種類があげられている。『守貞謄稿』のような近世都市部の風俗的な事例を概観した書物において、あえて江戸で食されたものとしてあげられていることから、これらの7種類の貝類は、他の貝類と比べて江戸において馴染みの深いものであったことが想定され、そのことは、当時、江戸において流通量の多いものであったことが想定される。実際に、「ばか」と「鳥貝」を除く5種類の貝類は、江戸の消費地遺跡から比較的多く出土するものである。その7種類のなかに、ウバガイとミルクイの2種類をのぞいてすべて含まれており、このことから、パレットとして使用されているほとんどの貝種は、江戸において流通量の多い貝類をもちいていたことが想定される。なお、今のところウバガイは新宿区坂町遺跡第4号遺構、ミルクイ

は同区尾張藩上屋敷跡 48 地点 173・3B-1 号遺構からしか出土していないことから特殊な事例であるのかしれない。これらの2種の事例に関しては、今後の他の史料や遺跡の調査を待って、検討を重ねる必要がある。

さて、『守貞謄稿』に記載されているものの内、漆パレットに利用されていない貝種について簡単に触れたい。まず、「あさり」、「さるぼう」、「しじみ」であるが、パレットとして用いられているものがいずれも殻長 50mm 以上の「大型」のものであるのに対して、以上の 3 種類は殻長 50mm 未満と「中小型」である。また、「蠣」については、その他の貝類と異なり、形状が複雑で一定ではない。つまり、サイズや形状の面から以上の 4 種類の貝類はパレットには不向きであったため使用されなかったことが想定される。

まとめると、漆パレットに使用された貝種は、

- ①江戸において馴染み深い貝種≠比較的、多く流通していた貝種
- ②殻高に対して殻長が長く、ほぼ一定の形状を呈している二枚貝類≠「蠣」
- ③殻長が 50mm 以上になる貝種≠「あさり」、「さるぼう」、「しじみ」

以上の 3 つの条件を満たしたものを使用していたものと推測される。

3. 貝殻製漆パレットの出土傾向(表2・3)

次に、貝殻製漆パレットと貝類遺体それぞれの出土傾向を概観する。特に出土件数の高い、ハマグリ、アカガイ、バカガイ、トリガイについて概観する。概観に際して、①1 遺構もしくはさらにその隣接する遺構よりまとまって出土する事例と②1 遺構から 1 ～ 2 点程度しか出土しない事例に分けて行なう。

(1) アカガイ

①1 遺構もしくはさらにその隣接する遺構よりまとまって出土する事例

- ・文京区東京大学本郷構内の遺跡工学部 14 号館地点 C1 区南側の遺構群

8 点出土、ベンガラ製作に使われた徳利、漆漉紙なども出土している。

- ・新宿区大京町東遺跡第 1 号遺構

大型ごみ穴から 16 点出土している。その他に漆工関係の遺物はしていない。

なお、以上の2箇所の遺構(群)は、共に19世紀に属する。

②1 遺構から 1 ～ 2 点程度しか出土しない事例

江戸遺跡において、6 遺跡 6 遺構から出土している。いずれもほぼ19世紀に属する。

(2) バカガイ・トリガイ

①1 遺構もしくはさらにその隣接する遺構よりまとまって出土する事例

- ・新宿区坂町遺跡第 4 号遺構
- ・新宿区尾張藩上屋敷跡遺跡第 42 地点 131・2 J-1 号遺構とその周辺の遺構
- ・新宿区三栄町遺跡 A 区 21 号遺構・B 区 1-b 号遺構

以上の 3 箇所の遺構(群)の共通点は、

- i) 大型ごみ穴遺構もしくは、その遺構を中心に出土している
- ii) 新宿区市谷地区に集まっている。

iii) 貝殻製漆パレットの他に漆汲用曲物桶、漆溜容器、漆漉紙など漆工関係遺物が共伴する(註 1)。

iv) これらの出土した遺構はほぼ 18 世紀に属している。

なお、坂町遺跡第 4 号遺構からは、これらの貝種のほかに、ハマグリとウバガイ製のものも出土している。

② 1 遺構から 1 ～ 2 点程度しか出土しない事例

新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡(1 次調査)第 5 号遺構において、バカガイ製のものが 1 点出土しているのみである。時期は 18 世紀中葉に属する。

(3) ハマグリ

① 1 遺構もしくはさらにその隣接する遺構よりまとまって出土する事例

- ・文京区春日町遺跡VI地点第 54 号遺構
- ・新宿区尾張藩上屋敷跡第 48 地点 173-3B-1 号遺構
- ・新宿区坂町遺跡第 4 号遺構

以上の 3 遺跡 3 遺構の遺跡の共通点は、

- i) 大型ごみ穴遺構
- ii) 漆汲用曲物桶、漆溜容器、漆漉紙などの漆工関連遺物が共伴
- iii) これらの出土した遺構はほぼ 18 世紀後半から 19 世紀初頭に属する。

なお、ハマグリのほかにも、尾張藩上屋敷跡第 48 地点 173-3B-1 号遺構からはミルカイ、坂町遺跡第 4 号遺構からはバカガイ、トリガイ、ウバガイ製のものも出土している。

② 1 遺構から 1 ～ 2 点程度しか出土しない事例

6 遺跡 10 遺構の事例がある。なお、属する時期は、17 世紀末～ 19 世紀にかけて様々である。

(4) まとめ

以上から、

- i) ハマグリは、すべての貝種のものとも共伴する。
- ii) バカガイ・トリガイと、アカガイは共伴しない。
- iii) バカガイとトリガイは、一箇所から大量に出土する事例のみで、1、2 点程度少量で出土することはほとんどない。

以上の傾向が抽出された。

4. 考察

最後に以上のような傾向が抽出された要因について考察をおこなう。

(1) 食物残渣としての出土傾向(表4)

まず、バカガイとトリガイの出土傾向の特異性について、食物としての貝類の流通過程から考察を行なう。

食物残渣としてのパレットに利用されている貝種の一般的な出土傾向について概観する。まず、消費地

遺跡における以上の4つの貝種の食物残渣としての出土傾向として、以下の2つに分類される。

i)消費地遺跡において頻繁に出土する貝種：ハマグリ、アカガイ

ii)消費地遺跡においてほとんど出土しない貝種：バカガイ、トリガイ

消費地遺跡からほとんど出土しないバカガイとトリガイに関しては、『守貞謄稿』や『本朝食鑑』において、剥き身にして売買されていたことが記されている。特にバカガイに関しては、中央区日本橋一丁目遺跡 269 号遺構(18 世紀後半)、同区日本橋蛸殻町一丁目遺跡(I 次調査)274 号遺構(18 世紀前半)、港区雑魚場跡遺跡など、当時、魚市場のあった周辺の遺跡から大量に出土する事例が報告されている。トリガイに関しては、今のところバカガイのような事例は見られないが、今後の調査においてバカガイと同様の事例が見つかる可能性はある。

また、『守貞謄稿』において、剥き身にされていた貝種の中に、「蛤」もあげられている。このことから、ハマグリを用いたパレットが、バカガイやトリガイのものとも共伴する要因として、一部にバカガイ・トリガイと同様に市場周辺にて廃棄されたものであったことによるものと推測される。つまり、少なくとも坂町遺跡や尾張藩上屋敷跡より大量に出土した貝殻製パレットは、日本橋などの魚市場の周辺で剥き身によって排出されたものを手に入れたものであることが推測され、さらに、比較的いろいろな貝種のものが混ざっていることから、貝種による選択性はなかったものと想定される。また、ハマグリやアカガイと異なり、バカガイやトリガイが1,2点程度少量で出土することがほとんどないのは、まさに剥き身にしていて手に手近になかったことによることにあると想定される。つまり、簡易な作業をおこなう際にパレットとして用いられた貝殻は、わざわざパレット用に市場などから買い受けて持ち込んだものではなく、自分の家で消費したものを用いていた可能性も想定される。

(2) 貝種による出土時期の違い(表3)

次に、アカガイとバカガイ・トリガイが共伴しない点について、時期的な出土傾向の違いからとらえる。まず、使用する貝種で以下のような時期差が見られる(表3)。

18 世紀	18 世紀～ 19 世紀	19 世紀
バカガイ・トリガイ⇒	ハマグリ	⇒アカガイ

また、尾張藩上屋敷跡内でも以下のような時期差が見られる。

18 世紀中～後	18 世紀後～ 19 世紀初
バカガイ(5)・ハマグリ(2)	⇒ハマグリ(7)・ミルクイ(2)
42 地点 131-2J-1 号	48 地点 173-3B-1 号

つまり、アカガイ製のものは、バカガイ・トリガイ製のものと時期においても全く重なることがない。一方で、ハマグリ製のものは、いずれの時期においても出土している。さて、以上のようなバカガイ・トリガイ製のものからアカガイ製のものへと変化する要因として、まず、19 世紀におけるバカガイやトリガイの水揚げ量の低下によるものが髣髴されるが、19 世紀に逆にバカガイが大量に採集された事例(『渡辺東淵雑録』)があるため、バカガイの生産量の低下との関連性は考えられない。

一方で、アカガイについては、漆ではなく赤色顔料の入っている事例もみられる。特に新宿区大京町東遺跡第1号遺構より出土した“パレット”とされているものの内、16点中2点が漆ではなく赤色顔料が入っていた。このような、赤色顔料が入っている事例は、すくなくともバカガイにおいては見られない。アカガイにおいて赤色顔料の入っている事例は、18世紀代の遺構からも出土している。一例として、文京区東京大学本郷構内の遺跡法学部4号館地点のE7-7号土坑から赤色顔料付着するアカガイ製のものが1点出土しており、時期は18世紀前半に属する(菅谷・成瀬1990)。

また、大京町東遺跡第1号遺構出土資料においては、付着した漆になかから紙が検出されている(難波・服部2004)。同様に、渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡(1次調査)1153号遺構出土のハマグリ(ハマグリの形状を残す漆塊1点(18世紀第4四半期～19世紀第1四半期)のなかからも紙が検出している(西本・伊藤1997)。この紙は、貝殻内の色漆を乾かないようにする為に蓋として用いたものであると考えられる。つまり、“パレット”としての機能よりも、“漆溜容器”としての機能のほうが強かったものと想定される。なお、バカガイを主体とする坂町遺跡4号遺構や尾張藩上屋敷跡第42地点においては、陶器や曲物製の多数の漆溜容器(漆容器)が相伴しており、また、貝殻製パレットからは、紙は検出されていない。

以上のことから、18世紀までは、顔料容器＝貝殻(アカガイ)、漆溜容器＝陶磁器・曲物など、パレット＝貝殻(ハマグリ・バカガイなど)と用途によって異なる素材のものが用いられていたのに対して、19世紀に入ると、顔料容器、漆溜容器、パレットを貝殻、特にアカガイのものに一括された可能性も想定される。その変化の要因については、今後の課題としたい。

謝辞

本発表の準備するにあたり以下の諸氏・諸機関からご教示及びご協力を賜った。芳名を記して謝意を表したい。

安芸穂子・石神裕之・大八木謙司・小林園子・鳥越多工摩・原祐一・堀内秀樹・横田龍介・東京大学埋蔵文化財調査室
・豊島区遺跡調査会 (五十音、個人・機関順、敬称略)

註

- 1) 三栄町遺跡に関しては、発表した際に大八木謙司氏から大量の漆漉紙が相伴していたことをご教示いただいた。
- 2) 写真は、『日本近海産貝類図鑑』(奥谷・編著 2000)より転載。

参考文献

- 奥谷喬司編著 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
- 北野信彦 2002「坂町遺跡出土漆器資料の材質と製作技法」『東京都新宿区坂町遺跡』(p.113-121)財団法人新宿区生涯学習財団
- 北野信彦・菅井裕子・肥塚隆保・佐藤昌憲 1999「春日町遺跡第VI地点出土の一括漆工関連用具の分析」『春日町遺跡第VI地点』(p.304-314)文京区遺跡調査会
- 魚類文化研究会編 2005『図説 魚と貝の事典』柏書房

菅谷通保・成瀬正和 1999 「(9)貝・角製品」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』
(p.478-479)東京大学遺跡調査室

難波道成・服部哲則 2004 「大京町東遺跡出土貝殻製漆パレットについて」『東京都新宿区大京町東遺跡』(p.120-121)株
式会社第三開発

西本豊弘・伊藤良枝 1997 「動物遺存体」『東京都渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡 本文編(第 I 分冊)』(p.370-377) 千駄ヶ谷
五丁目遺跡調査会

使用した報告書

渋谷区

千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997 『東京都渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡 本文編(第 I 分冊)』

新宿区

東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡遺跡IX』

東京都新宿区教育委員会 1988 『三栄町遺跡』

1991 『三栄町遺跡一骨角貝製品・動物遺体編一』

新宿区厚生部遺跡調査会 1992 『東京都新宿区細工町遺跡』

新宿区南町遺跡調査団 1994 『東京都新宿区南町遺跡』

新宿区四谷一丁目遺跡調査団 1998 『東京都新宿区四谷一丁目遺跡』

新宿区若宮町遺跡調査団 1998 『東京都新宿区若宮町遺跡』

財団法人新宿区生涯学習財団 2002 『東京都新宿区坂町遺跡』

2002 『東京都新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡』

2003 『東京都新宿区市谷甲良町遺跡』

株式会社第三開発 2004 『東京都新宿区大京町東遺跡』

墨田区

墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団 1996 『東京都墨田区錦糸町駅北口遺跡 I 』

中央区

日本橋一丁目遺跡調査会 2003 『東京都中央区日本橋一丁目遺跡』

中央区教育委員会 2005 『東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目遺跡』

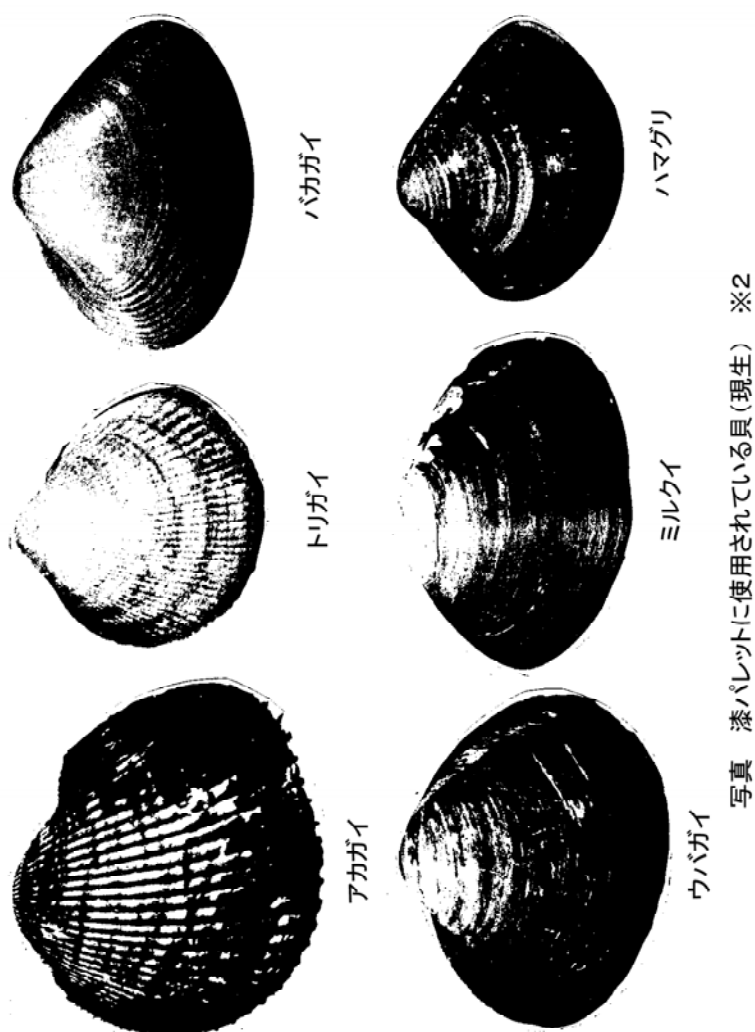
文京区

東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』

都立学校遺跡調査会 1998 『日影町 I 』

2000 『日影町Ⅲ-2』

文京区遺跡調査会 1999 『春日町遺跡第Ⅵ地点』



漆作業工程復元(北野・他1999, 北野2002)		坂町	尾張藩上屋敷			春日町VI	東大工14	大京町東
作業	道具(出土遺物)	4号	42地点	48地点	54号	C1区	1号	
漆を運び込む	大型漆汲用曲物桶・同小型汲曲物桶	○	○	○	○	—	—	—
漆樹液の夾雑物を除去して精製	漆漉布	○	—	—	—	—	—	—
【精製漆と顔料・植物藍を練り込み色漆を作成】							※	—
漆肌理を細かくする為に色漆を絞る	漆漉紙	○	○	○	○	○	○	—
色漆を漉して溜める	漆容器・漆溜容器	○	○	—	○	○	—	—
必要少量の色漆を取り分ける	貝殻製漆溜パレット	ハマグリ・バカガイ	バカガイ	ハマグリ			アカガイ	
漆継ぎ補修	地塗り作業 漆塗刷毛	○	—	—	—	—	—	—
	上塗り塗布作業 漆塗篋	○	—	—	—	—	—	—

※ベンガラ製作に使われた徳利が出土。

表1 漆作業工程と使用道具および各遺構(群)の出土遺物

区	遺跡	遺構	性格	時期	アカガイ			ハマグリ			バカガイ			トリガイ			ウバガイ			ミルケイ		不明	合計	遺跡の性格
					左	右	片	左	右	片	左	右	片	左	右	片	左	右	片	右	片			
新宿	四谷一丁目遺跡Ⅰ	B-大下水	下水溝	—			1																1	
新宿	市谷甲良町遺跡	第24c号遺構	地下室	18c中葉				1															1	御持組大縄地
新宿	三栄町遺跡Ⅰ	A区21号遺構	土坑(大型)	～18c後葉									2		1								3	
新宿		B区第1-b号遺構	土坑(大型)	～18c後葉									1		1								2	伊賀者組屋敷地
新宿		B区一括	—	—									1		3								4	
新宿	若宮町遺跡Ⅰ	4-5号遺構	ごみ穴	17c後半～18c前葉					1														1	大名下屋敷
新宿	細工町遺跡	第59号遺構	ごみ穴	19c中葉			1																1	拝領町屋
新宿	南町遺跡Ⅰ	第90号遺構	土坑	18c中後葉					1														1	御徒歩組大縄地
新宿	坂町遺跡	第4号遺構	大型ごみ穴	18c後葉～末葉				5	6	7	3	5	4		3	5	3	4					26	71 御持組大縄地
新宿	尾張藩上屋敷跡第42地点	42/124-2I-1	土坑	18c後半/19c前～中									1										1	大名上屋敷(庭園南東空地)
新宿		42/130-2H-1	大型土坑	19c前～中									1	1									2	大名上屋敷(御殿外周南西隅空地)
新宿		42/130-2I-1	土坑	—									1										1	大名上屋敷
新宿		42/131-2J-1	大型土坑	18c中～後				2				3	2										7	大名上屋敷(御殿外周土蔵南端)
新宿		42/131-2J-2	土坑	18c				2															2	大名上屋敷(御殿外周)
新宿		42/133-2I-1	土坑	18c前～中								1											1	大名上屋敷(御殿外周)
新宿		42/135-2J-2	土坑	18c後								1											1	大名上屋敷(御殿外周土蔵南端)
新宿	尾張藩上屋敷跡第43地点	43/143-2O-1	土坑	18c後					1														1	大名上屋敷(塙重門西側空地)
新宿		43/143-2P-1	土坑	18c末～19c前					1														1	大名上屋敷(塙重門西側空地)
新宿		43/143-2R-4	土坑	18c																	1		1	大名上屋敷(塙重門西側空地)
新宿	尾張藩上屋敷跡第44地点	44/159-2F	土坑	18c後～19c前					1														1	大名上屋敷
新宿	尾張藩上屋敷跡第48地点	48/173-3B-1	大型土坑	18c後～19c初				3	1	3										1	1		9	18 大名上屋敷(御細工所)
新宿	市谷砂土原町三丁目遺跡Ⅰ	第5号遺構	土坑	18c中葉									1										1	旗本屋敷
新宿	大京町東遺跡	第1号遺構	大型ごみ穴	19c2q～3q	10	6																	16	旗本拝領武家屋敷(貸地)
渋谷	千駄ヶ谷五丁目遺跡Ⅰ	1153号遺構	?	1780～1802									1										1	
渋谷		?	?	?					1														1	
文京	日影町遺跡	6号地下室	地下室	19c2q								1											1	町屋・大縄地等
文京		不明	土坑	不明						1													1	町屋・大縄地等
文京	東京大本郷構内の遺跡・法学部4号館	E8-5号土坑	土坑	18c末～19c初	1																		1	大名上屋敷(長屋付近空地)
文京	東京大本郷構内の遺跡・工学部14号館	B区SU63	地下室	18c後					1														1	
文京		B区SK357	土坑	19c前～中			1																1	
文京		C1区SK200	土坑	19c			1																1	御先手鉄砲組相屋敷
文京		C1区SK292	土坑	19c前～中				1															1	
文京		C1区SK293	土坑	19c				2	1														3	
文京		C1区SK297	土坑	19c前～中			1	1	1														3	
文京	春日町遺跡Ⅵ	54号遺構	土坑	18c中葉～19c						7	5	1											13	大名上屋敷(長屋?)
墨田	錦糸町駅北口遺跡Ⅰ	51号遺構	池	19c中	2																		2	旗本屋敷

表2 “漆パレット”の貝種による組成表

区	遺跡	遺構	性格	パレット材質(貝種)	17c				18c				19c			
					4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3
新宿	若宮町遺跡 I	4-5号遺構	ごみ穴	ハマグリ(1)												
新宿	三栄町遺跡 I	A区21号遺構	土坑(大型)	バカガイ(2)・トリガイ(1)												
新宿	三栄町遺跡 I	B区第1-b号遺構	土坑(大型)	バカガイ(1)・トリガイ(1)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第42地点	42/131-2J-2	土坑	ハマグリ(2)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第43地点	43/143-2R-4	土坑	ミルカイ(1)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第42地点	42/133-2I-1	土坑	バカガイ(1)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第42地点	42/135-2J-2	土坑	バカガイ(1)												
新宿	市谷甲良町遺跡	第24c号遺構	地下室	ハマグリ(1)												
新宿	市谷砂土原町三丁目遺跡 I	第5号遺構	土坑	バカガイ(1)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第42地点	42/131-2J-1	大型土坑	バカガイ(5)・ハマグリ(2)												
新宿	南町遺跡 I	第90号遺構	土坑	ハマグリ(1)												
文京	春日町遺跡 VI	54号遺構	土坑	ハマグリ(13)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第43地点	43/143-2O-1	土坑	ハマグリ(1)												
文京	東京大本郷構内の遺跡・工学部14号館	B区SU63	地下室	ハマグリ(1)												
渋谷	千駄ヶ谷五丁目遺跡 I	1153号遺構		ハマグリ(1)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第48地点	48/173-3B-1	大型土坑	ハマグリ(7)・ミルカイ(2)など												
新宿	尾張藩上屋敷跡第44地点	44/159-2F	土坑	ハマグリ(1)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第42地点	42/124-2I-1	土坑	バカガイ(1)												
新宿	坂町遺跡	第4号遺構	大型ごみ穴	ハマグリ(18)・バカガイ(12)・トリガイ(8)・ウバガイ(7)など												
文京	東京大本郷構内遺跡・法学部4号館	E8-5号土坑	土坑	アカガイ(1)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第43地点	43/143-2P-1	土坑	ハマグリ(1)												
文京	東京大本郷構内の遺跡・工学部14号館	C1区SK200	土坑	アカガイ(1)												
文京	東京大本郷構内の遺跡・工学部14号館	C1区SK293	土坑	アカガイ(3)												
新宿	尾張藩上屋敷跡第42地点	42/130-2H-1	大型土坑	バカガイ(2)												
文京	東京大本郷構内の遺跡・工学部14号館	B区SK357	土坑	アカガイ(1)												
文京	東京大本郷構内の遺跡・工学部14号館	C1区SK292	土坑	アカガイ(1)												
文京	東京大本郷構内の遺跡・工学部14号館	C1区SK297	土坑	アカガイ(3)												
文京	日影町遺跡	6号地下室	地下室	ハマグリ(2)												
墨田	錦糸町駅北口遺跡 I	51号遺構	池	アカガイ(2)												
新宿	大京町東遺跡	第1号遺構	大型ごみ穴	アカガイ(16)												
新宿	細工町遺跡	第59号遺構	ごみ穴	アカガイ(1)												

1. 出土遺構別

主体種	区	遺跡	遺構	18c				19c			
				1	2	3	4	1	2	3	4
バカガイ	新宿	尾張藩上屋敷跡第42地点	42/131-2J-1								
バカ/ハマ	新宿	三栄町遺跡 I	B区第1-b号遺構ほか								
ハマグリ	新宿	坂町遺跡	第4号遺構								
	文京	春日町遺跡 VI	54号遺構								
	新宿	尾張藩上屋敷跡第48地点	48/173-3B-1								
アカガイ	文京	東京大本郷構内の遺跡・工学部14号館	C1区南側								
	新宿	大京町東遺跡	第1号遺構								

2. 大型土坑もしくは遺構群

表3 “漆パレット” 出土遺構(群)の廃絶時期

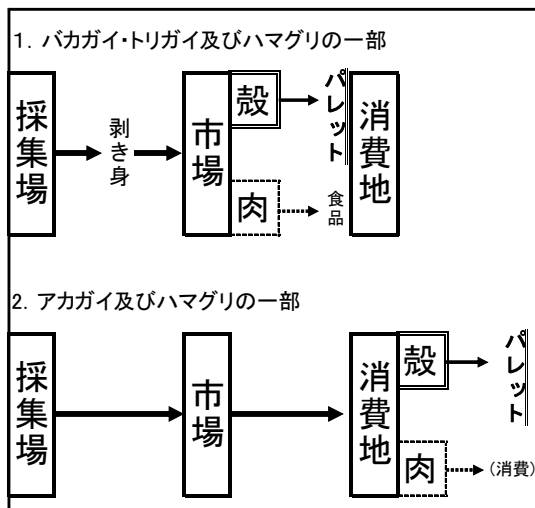


表4 貝殻の“パレット”として使用されるまでの来歴